

自分の考えをもちながら読む

—第6学年 成長の姿を「海の命」—

羽場 邦子

1 自分の考えを確かにするために書く

本校の国語科では、課題解決的な学習を中心にし学習を進めてきている。その中で一番大切にしていることは自分の考えをもつということである。高学年の子どもたちは、教材に対して自分なりの考えをもっている。共通課題設定の場では、一人一人が作った課題の中からどれを共通のものにするか考えを出し合い、課題を設定することができる。その過程で、教師の指導や支援はいうまでもない。これらの課題を解決する方法も子どもとともに考え合うことができるのも高学年であろう。子どもたちが設定した課題や学習方法が適切なものであったかどうかを振り返り、子ども自身が検討していくことで、自分なりの読みをつくっていくことができると考える。本実践は、自分の考えを確かにするために書く活動を中心にした文学的文章を取り上げ、課題設定や解決方法が読みを深めるのに有効であったかどうかを検討したい。

2 実践事例—成長の姿を「海の命」— (第6学年)

(1) 単元について

本作品は、少年太一が、一人前の漁師として成長する姿を通して「海の命」とは何かを問いかけている。村一番のもぐり漁師であった父は、大物をしとめてもじまんすることもなく「海のめぐみだ」と言う。与吉じいさ言う。「千びきでいいんだ。千びきいるうち一びきつれば、ずっと、この海で生きていける」と。父と与吉じいさの死後、太一はもぐり漁師になる。夢であった父を破った瀬の主クエに出会い、この魚をとらなければ本物の漁師になれないと思い葛藤する。そして、彼は瀬の主とともに生きることを選ぶ。「おとう、ここにおられたのですか。また会いにきますから。の言葉からクエの父を見たのかもしれない。本作品では、父・与吉じいさの漁師としての考え方を学び一人前の漁師に成長する太一の生き方を考えることができるようにする。また、海の表情やそこに生きるクエの様子から「海の命」について自分の考えをもつことができるようにしたい。

(2) 指導目標

- ① 表現の細かい点に注意しながら叙述に即して読み、登場人物の生きる姿を通して、海の命の主題を考えることができるようにする。
- ② 考えたことを話したり書いたりして、自分の考えと友達の考えを比べ読み深めることができるようにする。

(3) 指導内容と計画 (全12時間)

第一次 全文を読み、課題解決の見通しをもつ。…………… 4時間
第二次 太一の成長の姿を軸にして読み深め「海の命」の主題を考える。…………… 6時間
第三次 学習のまとめをする。…………… 2時間

(4) 学習の概要 (国語科、文学的文章「学習のステップ」参照)

① 出会う

題名読みでは「海」や「命」の言葉から自分のもつイメージを発表した。いくつかを挙げる。

海

生命の源、深い、荒れる、水平線、穏やかな風に吹かれて揺れる真っ青な海、泳ぐ、

命

人間、自然、生物、心臓、呼吸、誕生、生きる、金で買えない、一生懸命、心、尊いもの、寿命、

釣り, 港, 魚, ウミネコ, 養殖, 漁業, 塩, 宮島, 日本海, 海流, ゴミ, 潮など

素晴らしい, 輝いている, なくてはならない, 温かい, 必ずなくなる, ひとつ, 死など

《一読後の「海の命」についての考え》

A 海…10名 B 海に住む生き物…6名
C 魚…6名 D 瀬の主…15名

その後, 全文を一読し「海の命とは何か」について自分の考えとその根拠となる言葉や文を本文より書き出した。「海の命は何か」を整理すると左

記ように4つに分けられた。

	海の命とは何か	本文の言葉や文
A 海	<ul style="list-style-type: none"> ・流れとともに変わる海 ・人間が取り尽くすこともなく真っ青で魚や貝等で一杯な日本の今の海とは違う澄み切った海 ・海が生きているということ ・海を大切にすること ・海にも命がありそのうちに失われる ・父が命を吹き込んでいるクエのいる海 	<ul style="list-style-type: none"> ・季節や時間とともに変わる海 (ア) ・大魚はこの海の命だと思えた。(イ)
B 生き物	<ul style="list-style-type: none"> ・海で生きている全部の尊い命 	<ul style="list-style-type: none"> ・大魚はこの海の命だと思えた。(イ) ・千びきいるうち一びきをつればずっとこの海で生きていけるよ。(エ)
C 魚	<ul style="list-style-type: none"> ・海の中で穏やかに暮らす魚 	<ul style="list-style-type: none"> ・百五十キロはゆうに越えているだろう (イ) ・太一は瀬の主を殺さないですんだのだ (イ)
D 瀬の主 クエ	<ul style="list-style-type: none"> ・おとうが死んだ後の命を大魚のクエに例えている ・大魚が海の命, 海一番の長老 ・太一が追い求めていたまぼろしの魚, 村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主 ・瀬の主 (大魚) の一生 	<ul style="list-style-type: none"> ・大魚はこの海の命だと思えた。(イ) ・おとうここにおられたのですか。また会いに来ますから。(ウ) ・太一は瀬の主を殺さないですんだのだ (イ) ・岩そのものが魚のようだった。全体は見えないのだが, 百五十キロはゆうに越えているだろう (イ) ・青い宝石のような目, 刃物のような歯が並んだ灰色のくちびるは, ふくらんで大きい。(イ)

本文の言葉や文は次のようにまとめられた。その中でも(イ)に着目した者が多い。「大魚は海の命だと思えた」と書いてあるからクエが海の命」と話す子どももいた。クエに対する印象が強いことが分かる。

(ア)太一が見た海の情景
(イ)太一が見たクエの様子とクエに対する心情
(ウ)太一の父に対する心情
(エ)与吉じいさの漁師としての考え方

書き込みの観点は(ア)~(エ)をもとに, ①父の考え方②与吉じいさの考え方③太一が見た海の情景④

太一が出会ったクエの4つとした。書き込みの記述が多かったのは, ③と④であった。子どもたちは, 断片的ではあるが主題にかかわる部分に気づいているようにも思われた。

②見通す

《共通課題作り》

書き込みの中から, みんなで考え合いたい課題をカードに書く。



出し合った課題を観点別に分類し、共通課題を決める。



—作品全体を通しての課題—

㊦太一の漁師に対する気持ちの変化を考えよう。

—各場面の共通課題—

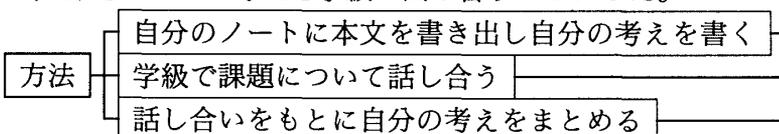
①父の生き方…1つ ②与吉じいさの生き方…4つ ③太一が見た海の情景…3つ

④太一が出会ったクエ…8つ ⑤作品全体にかかわるもの…2つ

《解決の方法を考える》

- ①父の考え方
- ②与吉じいさの考え方
- ③太一が見た海の情景
- ④太一が出会ったクエ

書き込みの観点①～④4つから太一の気持ちの変化をノートにまとめ、課題について考えを学級で出し合うことにした。



①②で太一は漁師としての生き方を学ぶ。③は筆者の海に対する考え方（主に作品の冒頭部分）や太一の思いが表現されている。④は太一の父への思い漁師としての生き方を象徴している。これらの理由から書き込みの観点①～④を読みの核にしていきたいと考えた。

③解く

《課題解決》

課題解決は、6場面に分けて行い、その後作品の主題を考え合った。観点①～④について子どもたちのノートを中心に述べる。

—①父の考え方—

子どもが着目した言葉

- ・村一番のもぐり漁師
- ・だれにももぐれない瀬にもぐる
- ・大物をしとめてもじまんしない
- ・海のめぐみだからなあ
- ・不漁の日が続いても父はは少しも変わらなかった

㊦「僕は漁師になる。おとうといっしょに海に出るんだ。」この言葉から漁師やおとうに対するあこがれが読み取れると思う。だれにももぐれない

(ノートより)

瀬にもぐり、二メートルの大物をしとめたりしても「海のめぐみだからなあ」という父は、本当に海のことを知っていて海を大切にしている人だと思う。そんな気持ちをもっている人が本当の村一番の漁師になれるのではないか。

㊦父はいつも（魚を取れなかった日も取れた日も）魚は海からの授かり物だと考えているの

で、・・・父は海のおかげだと思って海に感謝していると思う。海の潮の流れや波の高さなど、海を完全に理解しているので、いつも海と一心同体のような感じでうまく海と付き合いながら漁をしているのでだれにももぐれない瀬にもぐるができるのだと思う。太一も父と同じ考え方もって漁師になるときとすごい漁師になれるんだと思っていると思う。

子どもたちは「村一番のうまい漁師なのに謙虚な人」「まじめな人」「海に感謝している」などで父親を表現した。そして、そんな父を太一は好きなんだと発言した。この父の考え方は作品を読む上で重要である。子どもたちの疑問は、そんな父がなぜ、クエを打とうとしたのかということである。共通課題にもしていた。子どもたちは、「クエを打つことがもぐり漁師だった父のプライドだったのではないか」と考えた。これは、太一がクエに出会ったときにもう一度考えることにした。

－②与吉じいさの考え方－

子どもが着目した言葉

- ・ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなるとる。
- ・千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。
- ・毎日タイを二十びきとると、もう道具を片付けた。

共通課題

- ㊦なぜ、太一は与吉じいさのでしになったのか。
- ㊦与吉じいさの千びきに一びきでいいという言葉はどういう意味だろう。また、この言葉は太一にどういう関係があるのだろう。

㊦わたしは、与吉じいさの言っている言葉は太一の父の言っている言葉につながるような気がしました。それは、「必要な物以外とらない」＝「海のめぐみ」と同じこと。海に敬意している。

㊦魚が絶えないために、この海に住む魚の千分の一もとれば十分生活できるし、魚も絶えなくてすみ、海といつまでも気持ちよく付き合うことができるよという意味。

㊦与吉じいさは、太一の父が死んだ瀬に毎日一本づりに行っている。漁師としての経験が多い。「千びきに一びきでいい」という言葉は「海のめぐみだからなあ」という言葉と海に敬意をもっているところが共通しているので、与吉じいさはおとうと似ている所があると思う。だからこそ太一は与吉じいさのでしになったのではないか。

㊦千分の一をとれば水資源なんかも含めていい。太一もそうなれよと言っている。とりすぎるな。

共通課題は、与吉じいさと太一の関係であるが、子どもたちは、父の存在を意識していた。父の死んだ瀬に行っている与吉じいさ、経験の多い漁師、そしておとうと考え方が似ているなどの発言があった。「ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなるとる。」から与吉じいさは太一にあとを継がせたいと思っているという考えも多く出された。「海のめぐみ」と「千びきに一びきでいい」「二十びきとるともう道具を片付けた」の言葉に着目すると、父と与吉じいさが、海に生きる漁師としての生き方を示唆していると考えることができる。書き込みの段階では、父と与吉じいさについての気づきが少なかったが、課題に沿って読んでいくことにより父と与吉じいさが太一の漁師の生き方に大きく影響していることに子どもたちは気づいたと考えられる。

－③太一が見た海の情景－

共通課題

- ㊦太一は、なぜ海のどんな表情でも好きだったのか。それはどんな表情だったのか。

子どもが着目した言葉

- ・父もその父もその先ずっと顔も知らない父親たちが住んでいた海に太一もまた住んでいた。

- ・季節や時間の流れとともに変わる海
- ・ぼくは漁師になる。おとうといっしょに海にでるんだ。

☞「海のめぐみだからなあ」→生物を育む優しい面、「水中でこときれていた」→生物を死に追いやる厳しい面。

☞海は自分の何代も前の父親たちを見てきたので、そういう偉大さを太一は感じていたのだと思う。

☞季節や時間の流れとともに変わる海は二度とない海。輝く海，オレンジ色の海，静かな海，魚がいる海，ロマンチックな海。

この作品の冒頭部分についての読みである。この冒頭部分は筆者の海に対する考えが表現されている部分でもある。子どもたちは、漁師が何代もうけつがれているということや海はいろいろな表情を見せながらずっと昔からあるということに気づいている。授業では「海のいろいろな表情」を想像し、その厳しさ・優しさ・美しさなどを話し合った。

共通課題

- ☞太一にとって海が「自由な世界」というのはなぜだろうか。
- ☞「壮大な音楽」とはどんな音楽なのか。

子どもが着目した言葉

- ・太一はあらしさえもはね返す屈強な若者になっていたのだ。
- ・母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。
- ・いかりを降ろし、海に飛びこんだ。はだに水の感触がこちよ。海中に棒になって差しこんだ光が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。耳には何も聞こえなかったが、太一は壮大な音楽を聞いているような気分になった。とうとう、父の海にやってきたのだ。

☞太一は嵐さえもはね返す屈強な若者になっていたのだので、どんな海でも太一にとっては「自由な世界」と思えたのだと思いました。やっと父の海に来れたのがうれしくて…すがすがしくさわやかな海が太一に音楽を聞いているような気分にしたのだと思います。

☞「水の感触がこちよ」や「壮大な音楽を聞いているような気分」の後に「とうとう父の海にやってきたのだ」とあるので、父の海は太一にとってずっと気になっていた場所だと思う。「母の悲しみさえも背負おうとしていた」というのは太一がその海に行くことを表していると思う。「自由な世界」というのは太一が村一番の漁師の自覚ができたのだと思う。父の死んだ瀬だけ父の海のままだったような気がしてその瀬にもぐったのだと思う。

☞わたしも水がすごくきれいな魚もたくさんいる海でシュノーケリングしたことがあるんだけど、いきなり深くなりがけになっている所には、大きい魚も群れを作っていたし、小さい魚もたくさんいて、もうとても感動の世界で、わたしもなにかもとても壮大な音楽を聞いているようでした。太一はもぐりに慣れているので、いつもはこんなことはないのだが、「とうとう父の海にやってきたのだ」という表現から、いつもとは特別な他の緊張感や興奮があるんだと思います。とても大人数のオーケストラが奏で出す暗くもない、明るくもない、どこまでも続いていきそうな一音一音がどこまでも鳴り響いていきそうなどにかく壮大な音楽。

父も与吉じいさも海に帰った後の成長した太一が、父の海にやってくる場面である。子どもたちは「とうとう父の海にやってきた」太一の気持ちを「緊張」「興奮」「期待」などの言葉で表現した。「自由な世界」は太一がもぐり漁師として成長していると読み取った。そして、「壮大な音楽」はク

エに会う伏線としての重要な場面である。子どもたちは太一の気持ちを表すものだと考えた。「壮大な音楽」を「夢」「永遠」「静かな」「喜び」「美しい」「優しい」「きれい」「希望」「思い」「どこまでも続く海」「オーケストラが奏でる音楽」などの言葉で表現した。

④太一が会ったクエー

最も多く共通課題が出された。ここでは課題に沿って子どもたちの考えを述べる。

中心になる課題を《㊦巨大なクエにもりを打たなかったのはなぜか。》とした。

課題	子どもの考え	本文の言葉や文
①「こんな感情」とはどんな感情なのか。	<ul style="list-style-type: none"> 全く動こうとせずおだやかな目で太一を見ているクエに出会って、この大魚は自分に殺されたがっていると思った。 	クエの鼻づらに向かってもりを打つ。 永遠にここにいられるような気がした。
②なぜ泣きそうになりながら、この魚をとらなければ本当の一人前の漁師にはなれないと思ったのか。	<ul style="list-style-type: none"> 村一番のもぐり漁師だった父を破ったクエをとることが本当の一人前の漁師になり父を超えることができると太一は考えた。(何年も追い求めてきた魚をとらなければ、もう一生父を破ったこの魚に会えないかもしれない。これをつかまえば、父を超えるたいそうりっぱな漁師になれるんだ。) この時点で、太一のもりを打ちたくないという気持ちが分かる。しかし、とらないという気持ちも押しえきれていない。 	岩そのものが魚のようだった。 全体は見えないのだが百五十キロはゆうに越えているだろう。 自分が追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。
(太一の気持ちに変化する)		
③「水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した」とあるがなぜほほえんだのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> クエをおとうのように思い、瀬の主をとらえようとした自分がちっぽけでおろかに思えたから。 大魚が父だと思うことによって殺さないですんだ。大魚が父である以上とらえることはできない。太一は安心する。 	もりの刃先を足のほうにどけ、クエに向かってもう一度えがおを作った。 おとうここにおられたのですか。また会いにきますから。こう思うことによって太一は瀬の主を殺さないですんだのだ。
④なぜクエのことをおとうと言ったのか。	<ul style="list-style-type: none"> おだやかな目で見ているこの魚と向かい合っていると永遠にここにいられそう。 	大魚はこの海の命だと思えた。
⑤なぜクエを「この海の命」だと思えたのか。	<ul style="list-style-type: none"> 太一自身もおだやかな気持ちになっている。このクエが父親みたいに思えてきた。 	

「壮大の音楽」の海で会ったクエの中におとうをみることによって太一はクエを殺さずにすんだと子どもたちは読んだ。もりを打とうと思っておだやかな目でじっと動かないクエを殺すことができない太一の気持ちを「父だと思うことによってほっと安心した」と表現している。クエを「海の守り主」「海の中でりっぱに何年も生きている」「父や与吉じいさや海で生きた人が海に帰ってその人たちの魂宿っている」とも表していた。

観点①～④に沿って課題解決をしてきて、子どもたちに「太一は本当の一人前の漁師をどのように考えるようになったか」をまとめる場を設定した。

— 太一は本当の一人前の漁師をどのように考えるようになったでしょうか。 —
 ・千びきに一ぴきだけをとり続ける海を大切にする漁師

- ・父の言葉「海のめぐみだからなあ」と与吉じいさの言葉「千びきに一びきでいいんだ」を合わせて考えると、他の人がとらえられない物をしとめることが本当の一人前の漁師というわけではない。海のめぐみをいつまでも保つこと。
- ・「本当の一人前の漁師」と技術がすぐれている漁師は結び付かない。

ほとんどの子どもが、父や与吉じいさの言葉をもとに記述していた。これは太一がクエと出会うことにより、漁師として成長した姿を読み取っているものと考えられる。

《単元学習後の「海の命」についての考え》

	海の命とは何か	本文の言葉や文
A 海	<ul style="list-style-type: none"> ・海の表情 ・海はあらゆる海の生物を生み出すので、<u>海そのものが海の命</u> ・壮大な音楽をきくような海 ・海の豊かさ。大魚のことも海の命と言っているのは、その海を見守り続ける海の主に思えた。おとうでもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・季節や時間の流れとともに変わる海(ア) ・海のめぐみだからなあ。(カ) ・大魚はこの海の命だと思えた。(イ) ・太一は壮大な音楽をきいているような(ク) ・おとうここにおられたのですか。また会いに来ますから。(ウ)
B 生き物	<ul style="list-style-type: none"> ・海に住んでいる全ての生き物 ・漁師は魚をとり生活を営んでいるから<u>海のめぐみだ</u>と思う 	<ul style="list-style-type: none"> ・大魚はこの海の命だと思えた。(イ) ・アワビもサザエもウニもたくさんいた。(ク) ・海のめぐみだからなあ。(カ) ・千びきに一びきしかとらないのだから海の命は全く変わらない。(カ) ・激しい潮の流れに守られるようにして生きている。(ク)
D 瀬の主クエ	<ul style="list-style-type: none"> ・海に帰った(父や与吉じいさも)人の魂が乗り移った魚のこと ・この海でずっと生きて主になっていて海の命<u>そのもの</u> ・海の命というのは父の命が吹き込んである。だから太一は岩のような魚に会っても冷静でいられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・父がそうであったように、与吉じいさも海に帰っていったのだ。(カ) ・心から感謝しております。(カ) ・大魚はこの海の命だと思えた。(イ) ・父の海にやってきたのだ。(ク) ・太一は興味をもてなかった。(イ) ・興奮していながら太一は冷静だった。(イ)
E 父	<ul style="list-style-type: none"> ・海の命はおとうのこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・おとうここにおられたのですか。また会いに来ますから。(ウ) ・こう思うことによって太一は瀬の主をころさないですんだのだ。(ウ)
F その他	<ul style="list-style-type: none"> ・海を愛する人が海を守っていき、それからまた次の人に受け継いでいくのが海の命 ・大切に守るべき海に住む全ての生物と海に帰っている人の命 ・自然界全てが命 ・海にいる全てのものや父やその先ずつと顔も知らない父親たち 	<ul style="list-style-type: none"> ・海に帰りましたか与吉じいさ。心から感謝しております。おかげ様でばくも海で生きられます。(カ) ・父がそうであったように与吉じいさも海へ帰っていったのだ。(カ) ・千びきに一びきしかとらないのだから海の命は全く変わらない。(カ)(カ) ・父もその父もその先ずつと顔も知らない父親たちが…太一もまた住んでいた。(カ)

A	海… 6名	B	海に住む生き物…16名
C	魚… 0名	D	瀬の主クエ…11名
E	父… 4名	F	その他… 7名

一読後の考えと比較すると、「海」「クエ」の人数が減り、「海に住む生き物」が増えている。また、あらたに「父」「その他」の項目ができて

た。「その他」は「続いていく命」と言いかえられるだろう。単元学習後、子どもたちは、「命」にこだわりながら記述していったものとする。一線部分を読むと「海はあらゆるものを生み出す」「海の豊かさ」「海のめぐみ」「この海でずっと生きて主になって海の命そのもの」「次の人に受け継いで

- (ア) 太一が見た海の情景
- (イ) 太一が見たクエ
- (ウ) 太一の父に対する心情
- (エ) 与吉じいさの考え方
- (オ) 父の考え方
- (カ) 太一の命に対する考え方

いく」「大切に守るべき」などの記述がある。また、本文を書き出したものにも変化が見られる。一読後は、ほとんどクエに着目している。しかし、学習後では、左記のように(オ)(カ)が挙げられている。(カ)の一線部分を読むと、子どもたちは、太一が父や与吉じいさの考え方を引き継ぎもぐり漁師として成長していったことを読み取っているものとする。学習によって、自分なりの読み深めができたように思われる。

3 考察

(1) 作った課題は読み深めるのに有効であったか。

単元全体を振り返って、学習の仕方について自己評価をさせた。

◎作った課題は読み深めるのによかったか。

よかった…22名

難しかった…7名

必要のない課題があったので減らしたほうがよい…8名

- ・ちょっと多すぎて頭がこんがらがってしまったので、もう少ししぼればよかった。
- ・たくさん課題があったけど、全部つながっていたと思う。似ているような課題が多かった。
- ・少し難しい課題もあったけど、一つ一つ一生懸命考えることができました。そして、みんなの意見も聞くことができ考えが深まり課題が解けてきました。
- ・いろいろ難しい課題ばかりで考えるのが大変でした。でも、課題について話し合う際に、今まで気づかなかったことや分からなかったことが分かったりしてよかったです。しかしやっぱり、今回は「大造じいさんとガン」の時のようにうまく解決せず難しすぎたです。

学習しながら、「この課題はいらない」「これとこれは同じことだ」というものがいくつかあった。特に太一とクエが会う場面の共通課題は多く、整理が不十分であったと考える。多くの子どもたちがこれらの課題を振り返っている。学習の過程で課題の整理が不十分であると自分たちで気づくことも読む学習では大切である。また、課題の整理の方法について、子ども実態に沿いながら検討する必要があると考える。

(2) 解決の方法は読み深めるのに有効であったか。

本作品を読むために、次の4つの観点で考えをまとめていった。これらの観点は、子どもたちが

- ①父の考え方
- ②与吉じいさの考え方
- ③太一が見た海の情景
- ④太一が出会ったクエ

太一に寄り添って読んでいくうえで適切であったと考える。子どもたちのノートを読んでみると、①～④それぞれの観点でよく考えをまとめた。しかし、①～④のつながりを意識して「太一の漁師としての気持ちの変化を考える」を軸にして読むことは不十分であった。そのために、「課題が難しかった」という振り返りをもつ子どもが多かったのではないかと考える。

①～④は、読み深めるための観点であったが、それらをどのようにつないで学習を進めるかを子どもたちと十分に検討する必要があると考える。